

大学生の批判的思考力を養うための教材開発と評価 ～「嘘ニュース」を用いた授業実践～

Development and Evaluation of the Learning Material for Enhancing Critical Thinking Skills - Teaching Practice using Fake News -

柳谷 遥^{*1}, 元木 章博^{*1, *2}

Haruka YANAGIYA^{*1}, Akihiro MOTOKI^{*1, *2}

^{*1} 鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科

^{*1} Department of Library, Archival and Information Studies, School of Literature, Tsurumi University

^{*2} 東北大学大学院 教育情報学教育部

^{*2} Graduate School of Educational Informatics Education Division, Tohoku University

Email: motoki-a@tsurumi-u.ac.jp

あらまし：本論では大学生の批判的思考力を養うため、嘘ニュースを用いた教材を開発し、2クラスで授業実践を行った。授業前後で行った5件法によるアンケートの回答により比較検討を実施した。「探究心」因子に関する評価結果において有意差5%での変化が両クラスで認められた。嘘ニュースが彼らの「探究心」に関する内発的動機付けを刺激したことが推定される。今後の課題は「客観性」、「証拠の重視」の因子に効果が出るような教材を作る必要がある。

キーワード：批判的思考力、嘘ニュース、授業実践

1. はじめに

現代では、インターネットの普及により、膨大な量の情報を得ることができる。その中から適切な情報を取捨選択することが重要である。そのような場面に遭遇した際に批判的思考力は適切な判断を行う際の支えとなる。

批判的思考力とは複数定義が存在するが、道田⁽¹⁾において、批判的思考力とは「批判をきっかけに思考が深められること」と述べられている。

中央教育審議会⁽²⁾が指針として定めている、大学教育で養われる必要があるとされるジェネリックスキル（論理的思考力、コミュニケーション能力、数量的スキル、情報リテラシー、問題解決能力）を支える力の1つとして、批判的思考力が挙げられている。

道田⁽³⁾は、大学生の批判的思考力の実態調査を行った。そこでは、学年差がみられなかったことから「大学教育は批判的思考力の育成に十分な役割を果たしていないのではないか」と述べられた。

このことから本論では大学生を対象に、批判的思考力を養うための授業実践を行った。本論では平山・楠見⁽⁴⁾の研究で明らかにされた批判的思考態度を構成している4つの因子「論理的思考への自覚」「探究心」「客観性」「証拠の重視」を基に嘘ニュースを用いた教材開発し授業を行った。

2. 方法

授業実践の対象は鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科の1年次に開講されている「情報機器教育論」4限クラス30名、5限クラス25名の1年生から4年生である。授業は2016年6月20日、27日の2週に渡って行った。1週目は事前アンケートを実施し、次に情報を適切に判断するための態度である「情

報を鵜呑みにしない」「情報を正確に理解する」「判断が正しいかを振り返る」の3点についての講義をした後、本物と偽物のニュース記事を判断する真偽判定ゲームを行った。真偽判定ゲームは下記の流れで実施した。

- (1) ニュース記事のタイトルと要約された文章のみを学習者に提示する。
- (2) 本物か偽物を選択させ判断理由を記述する。その際、学習者自身に考える作業を行わせるため回答時間を3分設け、その間PC・スマートフォンを利用したインターネットでの検索行為や他の学習者との相談を禁止した。
- (3) 回答時間が終了した直後、1問ごとに問題の真偽の正解を発表する。

1週目の授業の最後に学習者に対して嘘ニュース記事を作成する課題を与えた。Web上に用意した回答ページに「作成した嘘ニュース記事のタイトル」「本文」「元にした記事の出典」「課題を行う際にどのような点に注意したのか」の入力項目を用意し、2016年6月26日までに提出させた。記事を作成する際には、必ず元となる本物のニュース記事からアレンジすることを指定した。これは、課題の質を保ち、現実味のない嘘ニュースの記事が作成されることを防ぐためである。また、学習者自身が元になるニュースを探すことで、批判的思考力を構成する「客観性」「証拠の重視」の因子が養われると考えた。

2週目では、1週目と同様の真偽判定ゲームを行う。その際、前日に提出された学習者の課題をもとに作成した嘘ニュースの記事を含めて出題した。

授業の事前と事後にアンケートを行った。授業と課題の効果をみるため、4限クラスでは課題を終え

た2週目、5限クラスでは課題を行う前の1週目に事後アンケートを行った。アンケートは平山ら⁽⁴⁾で大学生を対象に行われた「批判的思考態度尺度」の質問項目より15問を利用した。質問は、批判的思考力を構成する4因子、「論理的思考への自覚」「探究心」「客観性」「証拠の重視」に分けられる。

3. 結果と考察

アンケートの「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5段階評価の回答を得点化し、事前事後アンケートの平均値からWilcoxon検定とt検定を行った。

表1 アンケート結果まとめ

質問番号	因子	クラス	事前	事後	検定
9	探究心	4限	3.4	3.72	W
2	探究心	5限	3.32	3.64	W
5	論理的思考への自覚	5限	2.44	2.64	t

表1は検定結果から危険率が5%以下の有意な差があると判断できた質問である。表1の質問番号に対応する質問内容が以下になる。

- 9 分からないことがあると質問したくなる
- 2 どんな話題に対しても、もっと知りたいとう
- 5 誰もが納得できるような説明をすることができる

アンケート結果から「客観性」「証拠の重視」の因子には授業の前後に変化が見られなかった。

表2 課題の総提出数と誤った引用件数

クラス	提出数	誤った引用
4限	34	2
5限	29	1

表2は提出された課題の総提出数と誤った引用件数である。課題の内容から学習者が出典を確認していないことがわかる課題を「誤った引用」と判断した。誤った引用がされた課題は嘘ニュースを掲載しているサイト「虚構新聞」の記事を元に作成されている。4限クラスからは2件、5限クラスからは1件、確認できた。3件全ての学習者が「虚構新聞」の記事を本物の記事であると信じ、課題を作成した。全体の1割に満たないが、情報源を確認せず誤った引用を行った学習者がいた。このことから、授業内で学習者に「客観性」及び「証拠の重視」の重要性を伝えることができていないことが考えられる。学習者が「証拠の重視」の作業を行うことができるよう指導をすることが必要である。

両クラスで「探究心」の因子に統計的に有意な差があるという結果が表れた。授業内で行った真偽判

定ゲームでは、一時的に学習者の「調べる」行為を抑制したため、授業の前後で差が見られたと考えられる。このことから、真偽判定ゲームは学習者の「探究心」を内発的に動機づけ、「探究心」を身につける手段として有効であると推定される。

学習者自身がメタ認知、つまり学習者が自身の思考や行動を客観的に把握することを意味する「論理的思考への自覚」の因子については、身に付くまでに学習者に個人差があるため、5限クラスで効果があったと判断できるアンケート結果が出たことは各クラスの学習者の差によるものであると考えられる。

4. まとめ

大学生の批判的思考力を養うため、嘘ニュースを用いた教材開発と授業実践を行った。授業内で行った真偽判定ゲームは、批判的思考力を構成する4因子のうち「探究心」の因子には有効であると推定される。「論理的思考への自覚」の因子は習熟度に個人差があるため、2週分の授業では全ての学習者に身につけさせることは困難であると考えられる。アンケート結果で変化がみられなかった「証拠の重視」「客観性」の因子については、提出された課題より、誤った情報源から記事を作成した学習者が数名いたことが確認できた。これは学習者に重要性を伝えることができていないと判断できる。しかし、出典の確認、文章の作成を行うことで、「証拠の重視」「客観性」を養うことにつながるため、今後、学習者が「証拠の重視」「客観性」を意識できるよう指導を行い、授業を改善する必要がある。

謝辞

本論で行ったアンケートは放送大学が提供するリアルタイム評価支援システム(REAS)を利用させていただきました。本授業実践に協力頂いた鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科の学生に感謝する。

参考文献

- (1) 道田泰司: “批判的思考概念の多様性と根底イメージ”, 心理学評論, Vol.46, No.4, pp.617-639 (2003)
- (2) 中央教育審議会: “学士課程教育の構築に向けて(答申)”
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm> (参照:2017/02/08)
- (3) 道田泰司: “日常的題材に対する大学生の批判的思考態度と能力の学年差と専攻差”, 日本教育心理学会, Vol.49, pp.41-49 (2001)
- (4) 平山ら, 楠見孝: “批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響 証拠評価と結論生成課題を用いての検討”, 教育心理学研究, Vol.52, No.2, pp.186-198, (2004)